

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 5 月 23 日現在

機関番号：14302

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2014

課題番号：23531007

研究課題名(和文)ニヒリズムの積極的肯定に関する教育学的研究

研究課題名(英文)Pedagogical research for positive affirmation on Nihilism

研究代表者

相澤 伸幸(Aizawa, Nobuyuki)

京都教育大学・教育学部・准教授

研究者番号：20331259

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円

研究成果の概要(和文)：この「ニヒリズムの積極的肯定に関する教育学的研究」は、教育哲学の観点からニヒリズムに関する考察を行い、同時にわが国の学校教育においてニヒリズム克服のためにどのような学習が可能か、理論と実践の融合を目指した教育学の方策の新たな開発および提案を行うことを目的として行った。
そのために、教育思想の文脈においてニーチェ思想の再考察を行い、日本やドイツの学校教育におけるニヒリズムについての状況調査と分析をまとめ、ニヒリズムを前提とした教育学の構築を目指した。

研究成果の概要(英文)：This research is based on pedagogical philosophy for positive affirmation on Nihilism. Therefore the purpose of this research is also to make a new development and suggestions of pedagogical measures aimed at fusion of theory and practice.

In re-consideration of Nietzsche's thought in the context of education thought, summarizes the survey and analysis of the nihilism in Japan, and comparing with those of German students in relation to levels of satisfaction, pedagogy that assumes the nihilism will be able to build.

研究分野：教育哲学

キーワード：教育哲学 教育学 ニーチェ ニヒリズム 人間形成

1. 研究開始当初の背景

今日における教育的課題として、子どもたちの学びからの逃亡はよく言及されており、その観点から、学ぶ意欲や自己肯定感を育成しようとする取り組みは数多く行われている。たとえば学校教育では、教科教育以外の道徳教育や総合的学習の時間などにおいて、ボランティアや職場体験などを通じて早い時期から意欲や肯定感を養う取り組みは、学習指導要領でもすでに一般化している。しかしそのような意欲や肯定感を養う教育を、より広い観点から見て、今日の教育学体系の中にかに取り入れるべきか、まだその評価は定まっていないのが現状である。つまり、実践が対処療法的に行われるだけで、その効用を含めた方針が、きちんと理論的裏付けを得ていないと考えている。

子どもたちの学びから距離を置こうとする今日の状況を、本研究では「学びのニヒリズム」と捉え、その理論的位置づけと評価、様々な実践例の比較などを通じて、その克服そして肯定へむけての方策を考察するように研究を進めるつもりである。ニヒリズム(虚無主義)とは、簡単に述べるならば、目指すべき目的や価値が喪失してしまうことを意味する。じつはこれは、従来の教育学が前提としてきた教育目的や教育的価値という土台が、揺らいできていることも意味している。学びのニヒリズムを理論体系へ組み込むことは、学問的再編成を意味するのである。それこそニーチェのいう価値転換に該当するものであるが、これまでの教育学ではそうしたニヒリズムを学的要素として想定していない。

このように、本研究はたんなるニヒリズムの克服ではなく、ニヒリズムを積極的に評価した上で肯定し、その肯定を前提として教育へ取り入れたいと考えている。したがって本研究の調査部分では、自己肯定感を高める試みを行っている学校をできるだけ多く調査することで、学びのニヒリズムの特徴や本質を分析し捉えたい。日本の学校教育における道徳教育をさまざまな観点から調査・分析することは広く行われているが、上記のようなニヒリズムの肯定を前提とした学校教育の分析はかなり珍しいと言えよう。

こうした現状を研究の背景として捉え、本研究は以下のような研究目的をたてた。

2. 研究の目的

上記のような背景をまとめてみると以下のように言えるだろう。つまり、生きる力や自己肯定感、あるいは学ぶ力の育成など、現代の教育目的の方向性を一言で表現するならば、「ニヒリズムの克服に向けた教育的志向」と捉えることができる。現代の子どもたちは、学びのニヒリズムひいては精神的発達のニヒリズム状況に陥っており、学校などの教育においてはその克服に向けた数々の取り組みが行われ、その傾向は今後も継続する

必要があるという認識である。

そのような認識を受けて、本研究は、教育哲学の観点からニヒリズムに関する考察を行い、同時にわが国の初等中等教育における道徳教育においてニヒリズム克服と捉えられる学習指導を分析・検討し、双方から得られた知見によって、理論と実践の融合を求めて体系化した上で、ニヒリズムを肯定的に捉えるための教育学の方策の新たな開発および提案を行うことを目的としている。そして研究全体は大きくわけて分析と調査の部分とに分け、その双方の融合を図る方策について考察する。

3. 研究の方法

上記の目的を達成するために、本研究は3課題を設け、それぞれを2つの具体的課題にて構成し、それを進めていく方法をとった。

(1) [課題1] 教育思想の文脈においてニヒリズムを位置づける。

申請者はもともと、教育学におけるビルドゥング(Bildung=人間形成)概念について研究を進めている。教育学において、このビルドゥング概念は中核とも言える重要なものであり、現代の教育原理の根底にある思想である。しかし、このビルドゥング概念は、キリスト教的神を頂点とする人間形成観である。近代ヨーロッパでの教育学的思想系譜の中には、そうした神が、目標あるいは価値観の頂点に位置している。ニーチェが「神は死んだ」と言ったことは、キリスト教的意味だけでなく、教育目標や教育的価値観などのようなビルドゥング概念そのものの再転換という意義を持っているのであり、こうしたニーチェの教育思想について、Ch.Niemeyerなど欧米の最新の成果や、他の未評価の研究なども参考にして研究を進めていこうと考えていた。

そこで課題1については、次の2つの研究を進めることで達成しようと考えた。

(a) ニーチェにおけるニヒリズムに関する思想を考察する。

(b) これまでの教育目的論や教育価値論の問題点をニヒリズム肯定の観点から再構築する。

(2) [課題2] 日本やドイツの学校教育におけるニヒリズム克服についての状況調査を行った。

道徳教育が大切であるということは、誰もが指摘することであるが、その内実に対する明確なヴィジョン、その概念が持つ歴史的な変遷、あるいは理念的豊饒さなど、学問としての裏付けをきちんと得た上での総合的な把握となると、かなりの困難が予想される。本研究では、全体構想に向かって一定の成果を出すためにも、はじめは対象を日本に限定し、現状認識を総合しながら、道徳教育において特徴的な取り組みをしている学校を調

査・分析することから始めた。

そこで課題2については、次の2つの研究を進めることで達成しようと考えた。

(a)小中学校における道德教育で、生きる力や自己肯定感を高めるための教育内容を調査する。

(b)高等学校における道德教育の現状と課題を調査する。

具体的には、世田谷区教育委員会は教育特区を申請した上で「哲学」を設け、その中学生用のテキスト『教科 日本語 哲学』を作成し教育しているのでその調査を開始した。つぎに茨城県教育委員会がH19年度から始めた、県立高校106校全校での道德必修化を調査した。こうした特色ある取り組みの学術的検証から、できれば海外における実践と比較したいと考え、ドイツの学校を調査し、ドイツ・ヴァインガルテン教育大学の教授と共同でアンケート調査をするに至った。

(3) [課題3] ニヒリズムを前提とした教育学の構築とニヒリズム克服のための教育内容の開発を行う。

課題1でも述べたように、ビルドゥング(人間形成)概念に代表される近代の教育思想は、単純に言うならば直線的な進歩・発達観によって支えられていた。20世紀に入って、たとえばデューイなどが、完成された成長とはすなわち不成長であり、むしろ不完全や未熟といった一般的に消極的に捉えられがちな概念に積極的価値を置くように言っているが、それも徹底されていないと考えた。やはりニーチェのニヒリズム思想を取り入れた上で、ニヒリズム肯定を前提とした教育学への再構築を目指す必要があるので、最終年度を見据えて、総合的な研究を進めた。そして理論だけでなく具体性も伴って研究成果をわかりやすくするためにも、ニヒリズムの積極的肯定を可能とするような教育内容の開発に努めた。

そこで課題3については、次の2つの研究を進めることで達成しようと考えた。

(a)ニヒリズム肯定をデシプリン要素として取り入れた教育学へと検討を加える。

(b)学校における道德的人間形成の実践の具体的提言を行う。

4. 研究成果

(1)課題1を達成するために、ニーチェにおけるニヒリズムに関する思想を考察しながら、同時にこれまでの教育目的論や教育価値論の問題点をニヒリズム肯定の観点から再構築した成果として論文を発表した。それが、「18世紀における人間形成の目的について」と「人間形成論における目的論的構造について」の2論文である。

まず、「18世紀における人間形成の目的について」において示したのは、ルネサンスから始まる人文主義的な人間形成論やエックハルトやルターによってすすめられた人間

形成観である。それらの思想潮流がその目的として意識していたのは、キリスト教における似姿の思想であり、ルソー、カント、ヘルダー、ゲーテらの思想家を経ることによって、キリスト教的世界観や歴史観のもとで構成された神の似姿を究極的に参照する特殊人間形成論から、19世紀のより普遍的な一般人間形成論へと至ることができたと言じた。これによって、ニーチェ思想理解のための道筋を整えた。

つぎに「人間形成論における目的論的構造について」によって示したのは、時代や状況や環境や文化や人間などによる相違を考えれば、どこに向かうかという議論は真理問題として収拾のつかなくなる可能性が多く、論として成立しにくいということを出発点として述べ、その場合の対処方法を考えた。すなわち、どこに向かうのかという一方の等質的な枠組みで語ろうとする捉え方ではなく、どこからどのように形成するのかという多発的で多様な枠組みでの捉え方へと転換することによって人間形成論は近代の自律的個人の支持を獲得できるということを経験的には結論づけた。

これら2論文によって、ニヒリズムの肯定のためには、ニヒリズムを特殊人間形成論的に捉えるのではなく、一般性を持たせることが重要であり、さらには真理問題として捉えないことが考察の鍵であると考えた。

(2)課題2を達成するために、小中学校における道德教育で、生きる力や自己肯定感を高めるための教育内容、さらには高等学校における道德教育の現状と課題を調査したが、その際、世田谷区教育委員会や茨城県教育委員会に協力をお願いして調査を行った。

また実際にドイツのいくつかの学校を見学するうちに、日本とドイツの子どもたちの状況を比較しようと考え、ドイツ・ヴァインガルテン教育大学のL・クルド教授と共同で日独の青少年の価値観に関する比較研究を行った。本調査では現状だけでなく、中高生たちが思い描く身近な大人に対する価値観もあわせて調査し、様々な価値観の満足度や宗教観や自分の性格やくつろぎを感じる場所などを問い、その数値を比較することで、日本の中高生の価値観のいまの状況を示した。その結果分析について、クルド教授と共同でシンポジウムにて発表し、その内容をもとに主として日本側の回答を論文としてまとめたのが“A Study on the Values of Japanese Junior and Senior High School Students in Comparison with the Values of German Students”である。

さらに道德を論じるにあたって社会性についても考察する必要があると考え、課題1と課題2を橋渡しとしての位置づけとして論文「自然本性としての社会性の萌芽と展開に関する一考察」を発表した。人間の自然としての社会性を考えていくことは、実践的

も現実的でもないかもしれないが、この考察は人間そのものの基盤となるものであり、たとえ人間が社会的な動物であったとしても、その社会という枠組みや定義そのものが変化し続けているのであり、社会的動物としての人間の内実に変容し続けるのであるから、それを歴史的に考察することも重要であると結論づけた。

(3)課題3を達成するために、課題1と2の研究結果を踏まえて、ニヒリズム肯定をデザイン要素として取り入れた教育学へと検討を加え、さらには学校における道徳的人間形成の実践の具体的提言を行うためのビデオ講義を撮影した。

まず研究成果を教育学的内容へと反映させるために、『教育学の基礎と展開』を大幅に書き直して、第3版として出版した。これによって、ニヒリズム肯定に向けての教育学への反映を多少ではあるが果たすことができたと考えている。

つぎに、広く教師や子どもたちにもその成果を発信しようと考え、研究成果を講義したものをビデオ撮影し、5講義を京都教育大学のWebにて公開した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 4件)

相澤伸幸、自然本性としての社会性の萌芽と展開に関する一考察、プロテウス、査読有、16号、2014、1-14

相澤伸幸&Lothar KULD, A Study on the Values of Japanese Junior and Senior High School Students in Comparison with the Values of German Students、京都教育大学紀要、124号、2014、127-136
<http://ir.kyokyo-u.ac.jp/dspace/handle/123456789/8024>

相澤伸幸、人間形成論における目的論的構造について、プロテウス、査読有、15号、2013、39-51

相澤伸幸、18世紀における人間形成の目的について、プロテウス、査読有、14号、2012、71-84

〔学会発表〕(計 2件)

相澤伸幸、啓蒙の時代と現代：人間の属性について - 社会・統治・補償 -、日本ヘルダー学会、2014.11.15、東北大学(宮城県・仙台市)

相澤伸幸、A study on values in Japanese school students、The Symposium on the Topics of Education in Germany and Japan、

2013.3.4、京都教育大学(京都府・京都市)

〔図書〕(計 1件)

相澤伸幸、ナカニシヤ出版、教育学の基礎と展開〔第3版〕、2015、154

〔産業財産権〕

出願状況(計 0件)

取得状況(計 0件)

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究代表者

相澤 伸幸(AIZAWA, Nobuyuki)
京都教育大学・教育学部・准教授
研究者番号：20331259

(2)研究分担者

(3)連携研究者